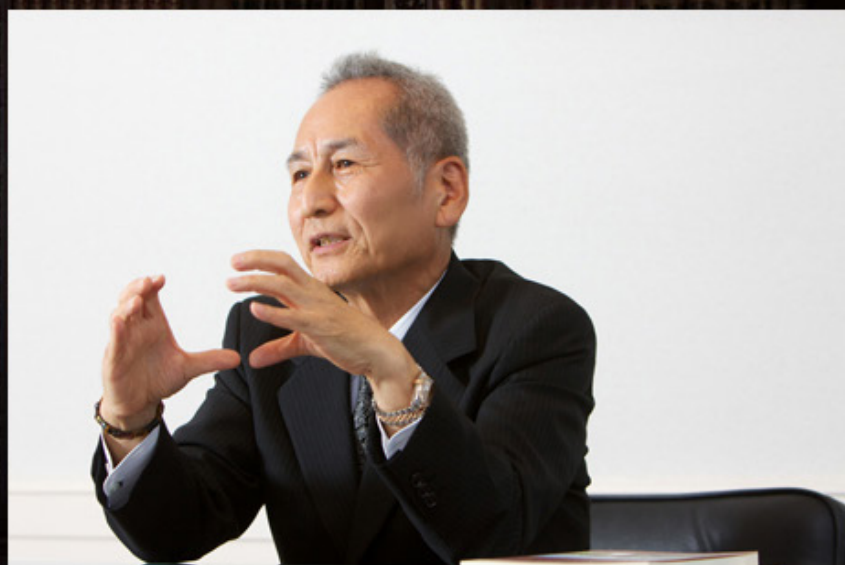


神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



昭和40年代から50年代にかけて日本最大の外国語専門学校に成長した神田外語学院。圧倒的な数のネイティブ教員や最新の視聴覚設備を駆使したKIFLメソッドによって、学生数は6500人以上に達しました。外国語としての英語教育が多様化するなかで、学院は日本語環境で最適な英語教育とは何かを探り続けていきました。40年にもわたり神田外語学院の教育に現場で携わってきた水野五行第6代学院長に、ダイナミックに変貌を遂げてきた学院の教育の歩みについてお聞きしました。

僕は、京都と奈良の真ん中、宇治の近くにある浄土宗総本山、知恩院の末寺で生まれました。貧乏寺の末っ子です。6人兄妹で、男では5番目だったから「五行」。子どもの頃は、「いつゆき」と呼ばれ、中学校1年生で得度式を挙げて、坊主名は「ごぎょう」になりました。

貧しい暮らしのなかで、寺の住職をしていた父は、幼い子どもたちに食べ物を与えようと、華奢な体で境内や裏の竹林を開墾しました。それで体を壊し、終戦直後、結核で死にました。ふたりの兄も戦死し、すぐ上の兄たちも寺は継がず、地元を離れて京都の大学で医学を学んでいたから、僕が檀家回りをしなくちゃならなかった。小さな村だから、檀家先には同級生がいるから、からかわれましたね。でも、中学校1年から高校3年生までの6年間、ずっと続けました。

貧乏だったけど、寺だから本だけはたくさんありました。同級生にいじめられて、子どもなりに傷ついて、家に帰ってくるとひたすら本を読みました。そして、文章を書くようになった。何かを訴える唯一の手段だったのでしょね。



国立大学に入りそこねて、1年間自宅で浪人したのですが、受験勉強せずに、文学ばかり読んでいた。欧米の文学も原書で読むようになった。最初は伊藤整が翻訳して発禁になったロレンスの“Lady Chatterley’s Lover”（『チャタレイ夫人の恋人』）。そしてヘミングウェイです。“Farewell to Arms”（『武器よさらば』）や“For Whom the Bell Tolls”（『誰がために鐘は鳴る』）といった作品でした。

地元に残るのも嫌だったし、理数系も不得意だったので、早稲田大学の文学部に進学しました。東京の私立大学に行くなんて勘当同然で上京してきたから、バイトをして学費と生活費を稼いで、学生寮では同級生と朝まで文学や哲学の論議をしていました。学校にはほとんど行かなかったなあ。

卒業後は、友人の実家の会社に就職したけど続かなかった。やはり物を書いて生きていくかったから、仕事には身が入らない。友達と日本国内を放浪して、文章を書いていた時期もあった。色んな友達の家に居候しながらね。（1/15）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



アメリカ全土を巡る放浪の貧乏旅行へ
N.Y.に着いたときには70ドルしかなかった

大学時代もアメリカ文学は読み続けていました。ヘミングウェイ、フォークナー、ヘンリー・ミラー、ノーマン・メイラー……。いつかアメリカの大地に立ち、彼らの描く世界の背景にある文化や国民性、社会の実情に直接、触れて、身体で理解してみたいと思うようになったんです。

出版社や広告代理店でアルバイトをしながら、5年間で100万円を貯めました。大卒の初任給が2万5000円だった時代です。3畳の部屋で食べるものも切り詰めて、必死にお金を貯めました。そして、昭和44（1969）年5月、28歳のときに、横浜の大栈橋から客船に乗ってサンフランシスコに向けて出航しました。

サンフランシスコに着いて驚いたのは、アメリカと日本の経済格差です。ハンバーガーを頼むとコーヒー付きで1ドルだった。360円あれば日本では彼女を連れてとんかつ屋に行ってヒレカツ定食を食べられましたよ。

仕事が見つからないから、今度はロサンゼルスに行った。それでも仕事はない。このまま帰るのは癪だから、グレイハウンド・バスでアメリカ全土を旅した。時にはヒッチハイクをして、バスターミナルで寝た。放浪の貧乏旅行ですよ。西海岸から南部へ。人種差別もずいぶんと受けました。公民権運動の真っ最中です。東海岸と内陸部をジグザクに行き来しながら北上して、ニューヨークを目指しました。



ニューヨークに到着したとき、ポケットには70ドルしか残っていませんでしたが、それから1年間いました。色んな仕事をしましたね。オーディオメーカーの技術者の通訳、コロンビア大学に来る日本人の研究者の案内、JTBの支社の仕事など。ニューヨーク大学で聴講もしました。でも、面白くない。結局、日本でも、アメリカでも、大学という場所には縁がなかった。

つまらないから、大学には行かず、ブルックリンなどで肉体労働ばかりしていました。僕はアフロアメリカンやプエルトリカンと友だちになろうと思った。“Hi Brother!”“Amigo!”と呼び合う仲になれば、彼らの居住区であるゲットー（Ghetto）にも出入りできるからです。

彼らの中にはベトナム戦争の帰還兵が多くいました。海兵隊は“Kill, kill, kill”を合い言葉にヴェトコンと思えば殺しまくっていた。国のために戦い、勲章をもらっても、アメリカに帰ってくると殺人者扱いです。僕は、強靱な肉体に刺青を描く彼らから悲哀や虚脱感を感じていました。彼らが吐く口汚いスラングは、社会への憤りというよりも、疎外された者の心の叫びのように思えました。（2/15）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



物を書きたいから休みのある教員を志望
試験での佐野公一先生の評価は辛辣でした

ニューヨークに来て、1年。ビザが切れる時期になって、そろそろ日本に帰ったほうがいいかなと思いはじめました。アメリカの北部やカナダを旅して、サンフランシスコから飛行機で日本に帰りました。昭和45（1970）年の6月です。

日本に帰っても相変わらず友達の家で居候をする根無し草の生活です。でも、その頃になると僕も29歳。友達はみんな仕事をして、結婚をして、子どももいる。居づらくてね。そろそろ、仕事をしなくちゃということで、ジャパントイズで神田外語学院の求人広告を見つけたんです。10月のことです。当時、他にも英会話学校はありましたが、日本人教員を募集しているのは神田外語学院だけでした。

英会話学校の教員を志望した動機は不純でした。物を書いて生きていきたいという気持ちは変わらなかったから、できるだけ自分の時間がとれる職種ということで、夏休みなど長い休暇のある教員を選んだのです。

採用試験は、本館の1階の突き当たりにある現在の学院長室で行われました。当時はあの部屋が教員室だったんです。試験を受けに来ていたのは30人ほど。正面の席には、学院長を務められていた佐野公一先生と当時の幹部が座っていました。部屋の片隅にある机の上には、学院で使っていた教科書や会話のテキスト「キフルーフ」が積み重なっていました。試験の課題は模擬授業です。テキストを使いながら、1人ずつ英会話を教える授業をやっていくよう指示されました。



公一先生の評価は辛辣でしたよ。ある中年の男性に番が回ってきたときのことです。当時は、ミシガンメソッドが一世を風靡していた時期で、パターンプラクティスが主流だったから、“He is walking.”“He is running.”“He is swimming.”と置き換えていく。彼は、動詞の意味に合わせてジェスチャーを加えていきました。

“He is swimming.”のときに、机の上で腹這いになって、手足をバタバタと動かしました。公一先生は「君は歳をとって、髪だって薄いんだから、そんな真似してもみっともないだけだ。学生には何にも伝わらないよ」と一喝です。女性の応募者のなかには、そんな言葉に腹を立てて帰ってしまう人もいたぐらいです。(3/15)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



公一先生が教員に求めた資質は
オーラ、カリスマ性、そして華

僕の番が回ってきました。テキストを開くと、ニューヨークの地下鉄で自動販売機が壊れて、チョコレートが出て来なくて、販売機を殴るという設定の会話が載っている。ニューヨークで暮らしていた僕は、「よし、これだ」と思いました。

僕は家庭教師や学習塾で英語を教えたことはありましたが、英会話学校での経験はない。だから、僕の前にデモンストレーション・レッスンをやった方々のジェスチャーを自分なりに取り入れながら、動きのある、面白い授業を作っていた。表現はその場で簡単なものに言い換えた。“This machine is out of order.”であれば、“This machine does not work.”という具合に。

何を言われるか分からないから、ある意味開き直っていましたね。好き放題やって、ダメならダメでいい。模擬授業が終わると、公一先生には、「君は若いし、元気があっていい。動きもある」と褒めていただきました。そして、採用になりました。



佐野公一先生の感性の鋭さ、直感力にはいつも舌を巻いていました。後になって分かることですが、公一先生は学院のカリキュラムや教授法には一切口を出されていなかった。でも、教員に求める資質は明確なんです。本能的にそれがお分かりになっていた。その人物にオーラがあるか、カリスマ性と華があるかなのです。オーラのある人間は、教室で学生をグイグイと引き込める。それこそが公一先生が教員に求める資質でした。僕も学院長のときは、オーラを持っているかを教員採用の重要な基準にしてみました。



公一先生は、厳しい方でした。外国人教員に対してもお構いなしです。長い髪をボサボサにしている教員がいれば、髪をグイとつかんで、「ちゃんと束ねろ」とおっしゃる。控え室のロッカーが半開きになっていれば、「こういうのは日本じゃ『アホの三寸開き』って言うんだ」とおっしゃった。通訳するのは僕の役目でした。

公一先生ご自身は、英語を話すことはなかった。でも、戦争に負けた日本が、アメリカに追いつき、追い越していくにはやはり外国語の修得だろうと思われていた。日本の将来を担う若者を育てることが、日本社会に対する恩返しであると信じられていたように思います。(4/15)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



学生数は昼間3600人、夜間3000人
昼休みの階段は満員電車のようにでした

僕が教員の職を得た昭和45（1970）年当時、神田外語学院は都内でもすでに最大規模の英会話学校だったと思います。他に社会人を対象にした1クラス数人の学校はあったけれど、神田外語のように大きな学校というのはありませんでしたね。

学院には当時、「キフルーフ」という看板授業がありました。各部屋にはテレビモニターがあり、マンガのキャラクターが会話する映像が放映されます。その流れに沿って英会話を覚えるのです。自前の英会話テキストもありました。コンピュータによる英会話の練習（CAI：Computer-Assisted Instruction）、LL教室での発音練習などもあり、独自の英語教授法を総合して、「KIFLメソッド」と呼ぶようになっていました。

僕は最初夜間コースの教員をしていました。当時は夜間のほうが学生が多かった。1クラス54名。週3日コースと2日コースがあり、3日コースは夜の6時から8時で、2日コースは6時から9時。そのクラスがたくさんあった。当時は、ミシガンメソッドに基づくパターンプラクティスで繰り返し声に出して、文法も表現方法も覚えるのが主流だったから54名でも十分に授業ができました。教員は“Repeat after me.”と言って、大合唱させればよいのですから。ただ、体力は要りましたね。





翌年の昭和46（1971）年には昼間部に移りました。本館が出来てまだ2年目です。その頃は、どのクラスも4クラスほどしかなかった。それがあつという間に増えていった。英会話本科なんてA、B、Cの3クラスだったのが、Zまでできた。学生数は昼間が3600人、夜間が3000人という時代に向かっていきました。昼休みに学生たちが一斉に階段を降りると、満員電車のような状態になっていましたね。

昭和40年代半ばから昭和50年代後半まで、学生数が伸びていったのは、北米やイギリスからネイティブ教員をリクルートしていたからです。僕が働き始めた当時は、欧米系の外国人教員は2人ぐらいしかいませんでした。あとは日系の外国人や在日の韓国人で英語がうまい人が教えていました。

佐野公一先生はカナダやアメリカに行き、教員を採用していたし、その仕事は後の学院長、アントン・グディングス先生が引き継いでいった。多い時にはネイティブの教員が専任だけで100名、教員全体では250名がいたんじゃないかな。（5/15）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



外国人教員100人いれば教え方は100通り
学院としての一貫した教育ができなくなっていた

学生数が増え、外国人教員が増えると、カリキュラムの組み方も変わっていきました。最初は、教務課が中心でやっていましたが、教員のなかにスーパーバイザーを設けて、彼らがかリキュラムを組むようになりました。それをどんどんシステム化して行って、新しい教員のトレーニングも外国人教員がやるようになったのです。

クラスで教えるのは、スピーキング、リスニング、ライティング、リーディングの4技能が基本です。このうち、スピーキングとリスニングは、ネイティブ教員が教える。ライティングとリーディングは、バイリンガルの日本人教員が教えた。僕自身、英語はすべて日本人の先生から習ってきたし、その指導法には信頼を置いていましたから、神田外語学院のネイティブと日本人が役割分担をする教育体制は効果があると思っていました。

教員たちの上には、スーパーバイザーがいて、カリキュラムを作り、他の教員の指導を行っていくという体制が整っていきました。ただ、スーパーバイザーによって、英語の教授法が違ってしまおうという現象が起きていきました。



あるとき、上のクラスで床を踏み鳴らすものすごい騒音が聞こえてきました。階段を駆け上がって注意しに行くと、その教室では学生たちはみな立ち上がって体を動かしている。いったい何をしているのかと聞くと教員は、「英語です。身体全体を使った学習法です（Total Physical Response Method.）」と答えるのです。



英語の教授法というのは、どれが完璧というのはいないですよ。教える相手の能力の段階によって最適なメソッドも変わります。外国人教員が100人いれば100通りの教え方があると考えたほうがいい。それぞれ専門的に学んだ教授法が違う。ダイレクトメソッド、ナチュラルメソッド、ファンクショナルメソッド……。教員それぞれに学んできた自負があります。

同じ学科の同じ学年なのに、隣のクラスでまったく違うことをやっているような状態になってしまっていた。まさに縦割りの状態で、教員間や学科間での情報共有がほとんど行われていなかったのが実情でした。神田外語学院としての一貫した英語教育ができなくなっていた時期でした。（6/15）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



課題を解きながら英語の4技能を高める
タスクベースと英語漬けの環境づくりを目指す

日本で英語を学ぶ場合、教室の外へ一歩出れば日本語の環境です。「その環境に最も適した英語教授法は一体何か？」という研究を始めるべきではないかと、当時、事務長だった佐野隆治会長は提案されました。外国人に対する英語教授法の分野でハワイ大学のジャック・リチャーズという研究者がいたので、その方に提案してもらおうという話になりました。彼が提案されたのが「タスクベースド・ラーナーセンタード・シラバス (Task-based/Learner-centered Syllabus)」だったので。

これは、学習の中心に学生を置いて、学生に課題を与えて、それを解きながら能力を高めていくという手法です。日本の英語教育では、先に挙げた4技能（スピーキング、リスニング、ライティング、リーディング）を別々に教えようとする。でも、実社会ではすべてが同時に必要となります。

例えばオフィスで働いていて電話がかかってくる。「水野先生はいらっしゃいますか」と聞かれる（リスニング）。「外出していますので3時には戻ります」と答える（スピーキング）。相手の伝言を聞き取り、メモに残す（ライティング）。そして、相手の会社をきちんと知るには資料を読み込まなければなりません（リーディング）。このように、実際の仕事では4技能をほぼ同時に使っているのです。



英語は、この4技能ができて、コミニカティブであれば、ホテル英語だって、秘書英語だって、スチュワーデス英語だって、何でもできるので。後は、それぞれの分野の専門用語を覚えるだけです。

でも、その教育効果を高めるにはできるだけ英語漬けの環境を作らなければならない。その考えに基づいて、神田外語学院はILC (Independent Learning Center) を設立し、それをVISTA (Village of Innovative Study and Training Access) に発展させました。職業教育には地下のアッセンブリーホールを作りました。神田外語大学でも、SALC (Self-Access Learning Centre) やMULC (Multilingual Communication Center) ができた。そして、英語漬けの環境づくりの極みが福島県のプリティッシュビルズです。(7/15)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



学院の英語教育を再構築し、
教育効果を異次元まで押し上げる

話は少し遡りますが、私は学院が右肩上がりに成長していくなかで、昭和55（1980）年に佐野学園の職員になりました。それまでは講師の立場で、カリキュラムをああしたい、こうしたいと提案していました。でも、講師というものはコストパフォーマンスを考えないから、スーパーバイザーという立場で提案しても、結局は経営サイドに判断を委ねるしかありません。悔しいですよ。経営サイドになれば、カリキュラムを動かせる。そう思ったんです。ただ、その決断は物書きとしての人生を諦める決断でもありました。

職員になってからは、学生部に配属され、少しでも学生たちのためになる学校にしようと、夏休みを返上して、学生のサークル規程も整えました。あとは海外研修の改革です。旅行代理店任せだった海外研修をほとんど自前でやるようにして、内容を充実させ、コストも大幅に削減しました。

神田外語大学が昭和62（1987）年に開学した後、理事長に就任したばかりの佐野隆治会長から企画室の勤務に任命され、本館近くにある電建ビルの1室を与えられました。ついに神田外語学院の英語教育カリキュラムの改革に着手する時が訪れ、その現場の責任者を任されたのです。



佐野会長から下されたミッションは、「教育部門、事務部門、コンピューターや英語の教育、神田外語学院が内包するすべての要素を再構築し、教育効果を異次元まで押し上げる教授法と組織を作り上げよ」というものでした。その教育システムを開発できれば、神田外語学院は社会や企業に貢献できる人財を輩出し、広い分野で企業と提携できると佐野会長は見通していたのです。

まずは教員をすべて集めてブレインストーミングを行いました。すべての授業を見学して、それぞれの評価すべき点と改善すべき点を記録していきました。そして、平成2（1990）年に教育改革委員会を立ち上げたのです。英語教育プロジェクト、組織プロジェクト、職業科目専門プロジェクトなどのプロジェクトを立ち上げ、その下に12のフォーカスグループを作りました。総勢60名の専任教員がそれぞれのフォーカスグループに参加し、資料を集め、さまざまなカリキュラムやシラバスの提案を行っていきました。（8/15）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



新しいカリキュラム、テキストの導入
課題は外国人教員の意識改革でした

目指すべき英語教育の基本は「タスクベースド・ラーナーセンタード・シラバス」です。英語教育のカリキュラムづくりには、コンサルタントとして、オーストラリアのマッコリー大学から、応用言語学の権威であるクリストファー・カンデリンとデイヴィッド・ヌーナンの両教授を招きました。両教授の指導のもと、学院の教員たちは、リーディング、ライティング、グラマーなどすべての科目を検証していきました。僕はただひたすら、文献リストの専門書を読みあさりました。カンデリン、ヌーナンという世界的な学者と議論するには、とにかく勉強するしかありません。

新しいカリキュラムづくりと平行して、オリジナルのテキスト“Options”も編集していきました。10名近くの教員が執筆に参加しました。ただ、これは難産でした。英会話のテキスト作成で著名だった開発研究者をイギリスから招聘したのですが、夏休みには、まるごと2カ月帰国してしまいます。仕事よりバカンスを重視する外国人と、12カ月働く私たち日本人職員とでは仕事のベースがまったく違うのです。教員同士、職員と教員の間で生じる英語教育への理解の違い、情報共有や意思疎通の問題といったものが、徹夜で専門書を読むことよりも、私にはずっと苦痛でした。



このテキストを試験的に導入できたのは、平成7（1995）年になってからでした。一部のクラスだけで使って、おかしな箇所を見つけ出し、修正していきました。4技能を統合して教えるタスクベースド・ラーナーセンタード・シラバスは、素晴らしい英語の教授法でした。それゆえに、この教授法を職業専門教育にも導入するべきだと考えました。学生が企業でも評価される実践力を養えると判断したからです。ですから、平成8（1996）年に、専門職業コースを含むすべてのコースで導入できたときはホッとしました。委員会は解散しましたが、僕は、教育センターの副センター長に就任し、完成したシラバスを実践させていく立場になりました。

新しいカリキュラムの導入は、教員の意識改革の場でもありました。外国人教員のなかには、「カンデリンやヌーナンといった第一線の研究者の教授法を学院の教育に導入する必要があるのか」という声もありました。それに、新カリキュラムでは学生一人ひとりの語学力を4技能それぞれについて評価する“Can-do Statement”が教員には課せられていました。1クラス30人で4クラス受け持っていれば120人分のシートを教員は書かなければならない。快く思わない教員がずいぶんいたことは事実です。（9/15）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



上司の判断に振り回されて悔しい想いもした
上に立てば、自分で決断して責任をとればいい

平成14（2002）年、退任されたグディング学院長の後を継いで、博士号を持つアメリカ人が学院長に就任しました。

新学院長はブレインストーミングをして、外国人教員たちからの意見を聞ききました。そして、教育システムの構築の歴史や改革の経過よりも、経営的な効率を優先し、スーパーバイザー制度に輪番制を導入したのです。役職を廃止して、教員が持ち回りで担当するという方針です。新学院長は合理的な方でしたから、輪番制で教員の負担を軽減するとともに、学院の人員費もカットするべきだと判断されました。

僕は、教員全体でスーパーバイザーの責任を負うのは難しいと思いました。どうしても、みんなで受け持つと責任感は生まれづらいのです。僕は僕なりに学院長に意見も言いました。どうしても考え方が合わず、職場を去った教員もいました。

学院長は、ご自分なりに神田外語学院の教育力の向上に努められていたのですが、日本の教育制度や、神田外語学院の教育の歴史、改革の経過を十分に理解されず、残念ながら就任の翌年にアメリカへ帰国されてしまいました。



佐野隆治会長は僕に学院長をやるよう命じられました。専任講師からスタートし、教員の管理職、教育部、学生部、そして企画室とすべての仕事を経験し、それぞれの仕事で手を抜かずに全力で挑んできたことが評価されたのでしょう。僕は「1カ月、時間を下さい」と言いました。

ずいぶんと悩みました。でも、振り返ってみれば、上司の判断に振り回されて悔しい想いもしてきました。上に立てば、自分で決断して、自分でやるだけです。何かあっても自分で責任を取ればいい。そう思ったのです。

妻に相談すると、「あなたは今までだって、佐野（隆治）理事長に重んじられて、相談されたり、やってくれて言われたり、でも結局やっているのだから、一番上でやったほうがストレスが溜まらないんじゃないの」と言われましたね。（10/15）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



5年かけて創ったテキスト“Options”
題材がずいぶん時代遅れになっていた

僕は、昭和45（1970）年に学院の教員になって、佐野公一先生にはずいぶん可愛っていただきました。ただ、2年ほどして、ある事情から公一先生を怒らせてしまった。自分は恥じるところがなかったから、謝りませんでした。でも、それが原因でずいぶん辛い思いをしました。それでも僕は辞めなかった。それは、佐野隆治会長がいつも味方にくれたからです。「親父は頑固だからな、まあ、気にするなよ」と、いつも言ってくれていたのです。

人は運に左右されることは多いでしょう。でも、その時、その時に支えてくれる人がいる。僕は佐野会長に支えてもらった。だから僕にしてみれば、佐野会長から言われたことなら、とにかくやり遂げようと思ってきた。まあ、火の中に飛び込めとは言われませんからね（笑）。逆に、新しい難題を言われると、「ああ、これで新しい勉強ができる」と思っていました。平成15（2003）年、僕は神田外語学院の第6代の学院長に就任しました。

平成3（1991）年から5年の歳月をかけて神田外語が創り上げたタスクベース・ラーナーセンタード・シラバスと24冊から成るテキスト“Options”。僕が学院長になった平成13年には出版からすでに5年が経過していました。学生たちを見ていると教科書を学校に置いて帰ってしまう。教員もどうやらあまり活用していない。テキスト内で使われている題材がずいぶん時代遅れになっていたのです。



このOptionsは、シラバスづくりのコンサルティングをしていただいたカ
ンデリンやヌーナンの両教授のいるオーストラリアの出版社で編集し
て、インドネシアで印刷していました。ですから、改訂するにしても時
間と費用がかかった。じゃあ、日本で出版すればよいのか？ そうなると
現地の出版社との契約が問題になっていく。日本で英語教育のテキス
トの編集ができる出版社があるのか？ テキストで使う写真やキャラク
ターなどコンテンツの使用許諾にどれくらい手間がかかるか？ 正直言っ
て、出版を続けるメリットがあまりなくなっていったのは事実です。

Optionsは、使える部分だけを抜き出して使うことにして、基本的なテキ
ストについては、市販しているテキストを採用することにしていきまし
た。(11/15)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



教育改革で得た経験とチームで
さまざまな英語に触れる新EICを構築

僕は学院長になってからカリキュラムをどうしていけばよいかを考え始めていました。カンデリン、ヌーナンの両教授とともにカリキュラムの大変革をしたときに一緒に研究を行った教員たちが、前学院長の方針でスーパーバイザーを降ろされたのかかわらず、「あなたが学院長になったら、もう一度やってもいい」と言ってくれていたのです。僕は彼らと、平成16（2004）年からカリキュラムを見直していきました。ただこれは公にはできない。我々だけの秘密業務でした。

特徴的だったのが、EIC（国際コミュニケーション英語）の改革です。EICは、ネイティブ教員が英語によって英語を教える科目です。全学科に共通する科目で、神田外語学院の英語教育の核となるものです。

それまで、週4コマあるEICを同じ教員が受け持っていました。ところがこれだと、神田外語学院には英語のネイティブ教員がたくさんいるのに、ひとりの教員の英語アクセントに接するだけなので実にもったいない。そこで、EICを1コマ増やして週5コマにして、2コマと3コマで教員を分けることを考えた。それも1学期ごとに担当の教員を変えていく。そうすれば、2年間で8人の違うネイティブ教員からEICを学ぶことができる。世界ではさまざまな英語が話されているのです。異なる8つの英語アクセント（8different tongues）を経験するチャンスを与えてあげたい、という意図がありました。



加えて、北米やイギリス圏以外からも、英語のネイティブをどんどん採用するようにした。フィリピン、インド、バミューダ、カリビアン・オーシャンなど。英語はイギリスとアメリカだけの言葉じゃない。それは僕の信念でした。

こうして、さまざまな英語に接しながらコミュニケーション能力を高める新EICを、ほとんど費用もかけずに創っていったんです。平成18（2006）年にスタートしました。教育改革に直接携わっていた我々だからこそ、さまざまな失敗を経て、こういった改革ができたのでしよう。

Optionsというテキストそのものは絶版になってしまったけれど、一連の研究開発を通じて得たタスクベースド・ラーナーセンタード・シラバスという教育理念は、学院、大学、キャリアカレッジ、プリティッシュヒルズなどの部門を超えて、佐野学園の英語教育を横串のように貫いているのです。（12/15）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



若者たちに必要な教育を創りたい
神田外語学院はいつも直球勝負でした

平成18（2006）年、GC（グローバルコミュニケーション）科を創設しました。グローバル化の時代、英語を話せるのは特別なことではありません。英語を使って何をするか、何を成し遂げるかが大切なのです。GC科は、実社会や企業での仕事に直結するカリキュラムと、それに対応する教授法を実現した点で画期的でした。学生たちは、データ分析、リサーチ、マーケティング、商品企画や生産・販売計画の立案、プレゼンテーションといった一連のプロセスをチームでクリアしていきます。

学生たちが生きていくこれからの社会は、一層のグローバル化が進んでいくことでしょう。この学科の学生たちは、グローバル社会で生き抜くための英語力と問題解決能力、そしてチームワークを養って、社会に飛び立っています。GC科はまさに、英語力と人間力の両方を同時に鍛え上げていく教育を実践するために創ったのです。

平成20（2008）年に英語基礎養成科を設立しました。英語の基礎を積み残してきた学生たちのための学科です。いや、積み残されてきた学生たちと言ったほうが正確でしょう。徹底的に基礎を教え、人前で話す訓練をして、自信をつけていきます。1年間の遠回りをしながらも基礎能力をしっかりと身につけたうえで、2年制のコースに入ってくる学生が増えていますね。



平成9（1997）年に設置されていた留学科では、カリフォルニア州立大学フレズノ校と3年編入の提携を結び、単位移管が可能な正規留学が実現しました。平成20年には経済的な負担の少ないコミュニティカレッジの2年次編入コースを創りました。現在は、留学科のほぼ全員が正規留学生としてアメリカに旅立っています。

留学するのが経済的に無理であれば、少しでも賃金の貰えるインターンシップで海外に行かせようと発想し、マレーシア、ブルネイ、ヴァトナム、中国といった国々のホテルなどと提携し、インターンシップ生を派遣してきました。若い学生たちを海外に行かせてあげたい。僕自身が20代にアメリカを放浪し、その経験が人生の糧になっているから、そう思ったのです。

神田外語学院はいつも直球勝負でやってきました。若者たちの教育に必要と思ったものを全力で創ってきました。変化球は投げない。変化球というのは、相手の目をかく乱させるだけのものです。学院が50年近く続けてこられたのは、いつも直球勝負だったからでしょうね。（13/15）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第15回 水野五行神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる



学校は決して無くしちゃいけないんです。
学校って、ふるさとだと思いますよ。

佐野公一先生、きく枝先生、そして隆治会長。佐野ファミリーは新しいこと、先端に行くことに非常に熱心です。他所と同じことをしない。思い切ってお金も使う。そして、自分たちで開発したものを隠そうとしない。隆治会長は、「うちは先端走ってればいいんだ。よそが真似すりゃ、うちはまた違うことをすればいい」と言います。5年もかけて実現した教育改革の内容だって、誰でも参加できる会議や講演会で発表しました。会場にはライバルの語学学校の教員や職員がたくさんいましたよ。

とにかく、常に一歩先のことに挑戦する。佐野会長は決して失敗を恐れずに、私たち教職員にも挑戦することを望みます。たとえ企画したように業務が達成できなくても、挑戦する姿勢で物事を考え、業務に取り組む思考を何よりも評価してくれるのです。その姿勢は今も変わっていないと思いますよ。

最近の例ではHELP (Hybrid English Learning Program) の開発です。学院には内気で、人前では自由に話せない学生もいる。その会話能力をどう上げるか？ コンピュータのネットワーク上に仮想疑似空間を創り、実社会での場面設定でアバター (Avatar) との対話を通じて会話力を養っていくコンセプトが生まれました。独自のシステムが開発され、2010年にはカリキュラムに導入されました。失敗やコストを気にせず、一歩先の教育法を開発する環境があるから実現した授業です。



では、教員がやるべきは何でしょうか。それは、学生のモチベーションに火を点けることです。教員というのは、学生とともに学ぶ「コーラーナー（Co-Learner）」でもあり、学院の先生方には言っています。優秀な教員は説明がうまい。でも、真の教員は学生のやる気に火をつけられる。それだからこそ、佐野学園で実践している、オートノマスラーナー（Autonomous Learner：自律学習者）を育てられるのです。



教員が大切にすべきは生徒とのコミュニケーションです。まずは名前を覚えること。僕が教員を始めた頃は1クラス50人で7クラス受け持てば、350人の生徒の名前を覚えなくちゃならない。それもゴールデンウィークまでにです。どうしても覚えられないときは、紙に名前と将来の夢、趣味などを書いてもらって、全員の顔写真を貼付けて覚えた。名前を覚えて、コミュニケーションをする。教員が学生たちに愛情を注いでいる自信があれば、時に強く怒ったりしても大丈夫だと思います。

今でも数十年前に卒業した学生から連絡を受けることがあります。「海外に住んでいて、また大学で学びたいから成績表を送ってほしい」と言われて、その学生を覚えていたから推薦状も書いて送ったら、返事が来て、「手紙を見て驚きました。水野先生だと思わず叫んでしまいました」と感謝してくれました。学校は決して無くしちゃいけないんです。学校って、ふるさとだと思いますよ。（14/15）

第15回 水野五行 神田外語学院第6代学院長
真の英語教育を築き、若者を育てる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



とにかく笑顔で挨拶ができれば、
きっと人と人はつながっていけるはずです

振り返れば、大学時代は学校にも行かず、文学を乱読し、とにかく友人達と青臭い議論をしていました。就職もせずに、今で言うフリーターをしながら金を貯め、アメリカを放浪する貧乏旅行をしていた20代。でも、今になって思うのはそういった一つひとつの体験や教養が、私自身の「引き出し」となり、神田外語学院で学生たちを指導していくうえで、とても役立っているということです。

だから、神田外語学院で学び、働いている人たちには、自分に対して投資をして、たくさん本を読み、そして教育関係以外の人々とたくさんつき合ってほしいと思います。それがきっとみなさんの引き出しを作っていくはずです。

そして、温かい人間になってほしいですね。感謝の気持ちを忘れないでほしい。人の痛みを分かる人間になってほしい。僕は大学時代に、実存主義だ、西洋哲学だ、サルトルだと議論してきた。でも、結局は、お寺の息子なんです。輪廻です。ここで誰かに親切にすると、回り回って自分に帰ってくる。自分の子どもや孫が誰かに親切にもらえる。だから、やっぱり感謝の気持ちは忘れてはいけません。



佐野学園には、“Languages are the foundation to link the world in peace. (言葉は世界をつなぐ平和の礎)”という建学の理念があります。もうひとつ、佐野きく枝先生がよくおっしゃっていたのは、「笑顔は世界をつなぐパスポート」という言葉です。英語をしゃべれなくても、とにかく笑顔で挨拶ができれば、きっと人と人はつながっていけるはずです。僕は今もそれを強く信じています。(15/15)

水野五行 (みずのいつゆき)

昭和17 (1942) 年に生まれる。早稲田大学第一文学部を卒業後、アルバイト生活で資金を貯め、昭和44 (1969) 年にアメリカへ渡航。全米を旅し、ニューヨークで1年間暮らした後、帰国。昭和45 (1970) 年10月、神田外語学院英語専任講師になる。平成元 (1989) 年より企画室の配属となり、学院の英語教育を再構築するプロジェクトで中心的存在を担う。平成15 (2003) 年、神田外語学院第6代学院長に就任。新EICの導入、新学科の設立、海外インターンシップ制の導入など革新的なプログラムを実行に移してきた。平成24 (2012) 年3月、学院長を退任。現在も佐野学園の理事として学院の教育に力を注いでいる。